

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 東京都市大学  
所 属 環境創生学科  
名 前 丹羽由佳理  
作成日 2022年10月25日

## 1. 責務

私は環境創生学科で都市環境分野に所属し、建築・都市計画を専門とした教育・研究活動を行っている。主たる教育活動は、「講義」、「研究」、「学務」に大別される。

「講義」は、以下の科目を担当している。

### 【学部】

事例研究(1)(2) : 3年生

卒業研究(1)(2) : 4年生

都市環境学概論 : 1年必修

都市環境データ分析演習 : 2年

都市プランニング論 : 3年

### 【大学院】

特別研究(1)(2)

都市環境モデリング(英語クラス, 日本語クラス)

「研究」は、外部資金による研究プロジェクトの遂行、研究室に所属している3年生、4年生、博士前期課程の研究指導を行なっている。

「学務」は、学科教務委員、副学長補佐(教育担当)、教育開発機構FDセンター室員、クラス担任、大学戦略室会議などを担っている。

## 2. 理念

環境学部は多様な就職先が想定されるため、研究・講義で身につけたエッセンスを社会人になってからも活用できるようにすることが重要である。私は、以下の理念を掲げている。

### I.都市環境の実際を理解する技術の習得：

建築・都市計画の分野は、実務と知識の両方が必要である。学生には、実際のプロジェクトに参画してもらったり、現地調査やデータ分析を深めたりすることで実務と知識の両方をバランスよく培って欲しいと考えている。

### II.深く思考し客観的に分析できる技術の習得：

研究室では、論文(学術論文の投稿)、コンペ(都市・建築コンペティションへの挑戦)などのメニューを提示し、学生のニーズに合わせて指導を進めている。学生が自ら深く思考し、客観的にデータ分析はできるデータ分析ができる技術を培って欲しい。

### III.自分のアイデアを表現し伝える技術の習得：

論文を組み立てるための思考力とアイデアをビジュアル化する表現力を培って欲しい。自分のアイデアを表現するためには、多様な知識だけではなく都市環境の実際を理解し、客観的に分析できる技術を備えておく必要がある。

### 3. 方法

本学の教育理念は、「ボーダーを超えて、学生と教職員が共に考え、学び、行動することで社会に貢献できる人材を育てる」ことである。私は、学生と教職員のつながりを重視し学生の豊かな発想を尊重した教育活動を行いたい。以下に、具体的な方法を示す。

#### I.都市環境の実際を理解する技術の習得：

講義では都市開発の様々なプロジェクトを紹介したり、実務者の意見を紹介したりしている。研究では、都市計画・建築に関わるコンペティションへの挑戦を経験したり、フィールド調査に赴いたりして実体験を蓄積させている。自治体へのヒアリング調査や都市開発を担っている多くの企業と共同研究に参加することで、学生が都市環境の実際を理解することにつながる。

#### II.深く思考し客観的に分析できる技術の習得：

講義では、基礎的な学力に留まらず、コミュニケーションと可視化技術の習得を重視している。学生が発表するときには「相槌」を打つように心がけており、発表に抵抗を感じさせないために「パス可能」と伝えている。研究では問いの構築、調査計画、データ分析、考察、結果の記述方法を教えており、学術論文への投稿もしくは学会発表を経験する。大学院講義では、分析結果のミスリードや調査のバイアスなどについて学生どうしで議論できる時間を設けている。

#### III. 自分のアイデアを表現し伝える技術の習得：

学生が自らの考えを言葉・スケッチなどで表現できるようになるために、講義では手書きのスケッチやダイアグラムを取り入れたワークを与えている。デジタル化社会において自分の字面やスケッチで現れてくる「個性」を大切にしたいと伝えている。研究では、データの分析結果やシミュレーションの解析結果をどのように表現すると伝わりやすいかを一緒に検討する。

#### 4. 成果

3つの理念に対して、以下のような成果が得られた。

##### **I.都市環境の実際を理解する技術の習得：**

社会との接点を与えることで学生の学習意欲が向上し、国際学会で受賞したり査読付論文に掲載されたりした。自治体や企業へのヒアリングを通して社会的課題を認識できたことにより、修士研究へ進学してより深く研究したいという希望が出るようになった。

##### **II.深く思考し客観的に分析できる技術の習得**

学部講義では、授業後半になると学生からの質問が多くなり、学生自ら発表したいという学生が増えた。大学院講義では、学生が修士研究と結びつけた思考をするようになり、分析手法の落とし穴や分析結果に対する解釈を悩む姿がみられるようになった。

##### **III.自分のアイデアを表現し伝える技術の習得：**

都市環境の実際を理解することや分析技術の習得は、表現力を培うことにつながった。コンペでは、2018年、2019年に3件受賞した。2020年には奨励賞を受賞した。研究では、精緻な分析結果を可視化したり、伝わりやすいグラフを描けるようになったりした。2021年度は、国際学会での優秀発表者賞を2件受賞した。2022年度は、学部生がとりまとめた論文が国際学術誌に論文掲載された。

## 5. 目標

私自身の目標は、これら3つの責務(講義・研究・学務)のバランスを考慮し、丁寧な教育活動を遂行していきたい。以下に短期的な目標と長期的な目標を示す。

### **[短期的な目標]**

学生個人のペースを尊重した研究指導を行う。学生自身がやりたいことを優先し、学生が心身ともに健康な状態で研究活動にとりくめるように心がける。

### **[長期的な目標]**

私自身の責務である「講義」「研究」「学務」の3つのバランスを考慮し、相互リンクしあう関係だと意識しながら教育活動を行う。

【添付資料】

[1] 授業評価アンケート：[https://www.tcu.ac.jp/guidance/efforts/effort\\_6/](https://www.tcu.ac.jp/guidance/efforts/effort_6/)

[2] 学生実態調査：[https://www.tcu.ac.jp/guidance/efforts/effort\\_6/](https://www.tcu.ac.jp/guidance/efforts/effort_6/)

[3] シラバス：<https://www.tcu.ac.jp/academics/syllabus/>